

「家」の檀家、「個」の信徒

副住職の秋田光軌です。先日、住職・副住職や寺族が対象の講座「未来の住職塾」の見学に伺いました。急激な人口減少、経済的不況といった時代背景から、法要の参詣者は減り、檀信徒は次世代に引き継がれにくい。全国的にお寺をめぐる環境は厳しさを増しているといえます。講師の方は、これまでは「家」が菩提寺を代々支えていたが、これからは「個」がお寺を選択する時代になる、とおっしゃっていました。激変する環境のなかで、お寺がその役割を見失うことなく、どのように生き残っていくのか、問題意識を持った方々が活発な議論をされておられました。

国立社会保障・人口問題研究所のデータによれば、既婚未婚を合わせて、2035年には男性の4割、女性の3割が生涯子どもをつくらないという予測が出ています。たとえ結婚したとしても、様々な理由で積極的に子どもをつくらない人々がいるということです。このままいけば、近い将来に「家」という概念自体が当たり前でなくなることは誰の目にも明らかです。

とはいえ、「家」から「個」への転換は、そう悪いことばかりでもありません。文筆家として活躍されている小出遥子さんは、特定の宗派の檀信徒ではありませんが、「いのちからはじまる話をしよう」をテーマにお寺で対話の場を開かれており、その想いに共感する「個」が集まり大きな動きになっています。また、曹洞宗僧侶の藤田一照さんは、座禅を軸にしたワークショップを様々な領域の方と行い、主催する仏教塾には多くの市民が集まっています。たとえば僧侶と医師とボディーワーカーが、互いの専門性を分かち合いながら、ともに生と死を探究する。上記のような動きは、「個」としての人々と仏教側が関わり合うことによって、はじめてひらかれる可能性を示しています。

ひるがえって、浄土宗大蓮寺というお寺はどのようにあるべきか。おそらく重要なのは、お檀家さんとともに「家」のご先祖さまの供養を勤めながら、「個」である信徒としてもいかに関心を持っていただけるか、そのための基盤づくりだと考えています。主体的にひとつの道を選択するというのが、法然上人の示した宗教的態度でした。時代の価値観が「家」から「個」に移り変わるとしても、大蓮寺を「わたしのお寺」として選択していただける、そんな場所であるように心がけていきたいと思っています。



——入檀されたのは一昨年ですが、今は大蓮寺にどのような印象をお持ちですか。

竹鼻「はじめて伺った時から、皆さま丁寧で、親切に対応していただき、とても心が安らぐ場所です。いろんな行事に通うたびに、この次も来たくなるような気持ちにさせられますし、住職のご法話がエネルギーギッシュで、バラエティに富んだお話をいつも楽しみにしています。寺報も毎月発行されていますが、他のお寺では珍しいことではないでしょうか。」

——ありがとうございます。そもそも、大蓮寺を選ばれたきっかけは何だったのですか。

竹鼻「もともと生まれが上町筋と谷町筋のあいだで、上町台地という土地に慣れ親しんで育ちました。都会でありながら、

文化的で広々とした環境が、他のどの町よりも魅力的で、お隣の生國魂神社には何度も参拝していました。そういった理由もあり、上町台地でお寺を探していたところ、ご住職の奥様のお人柄に惚れ込んだのがきっかけです。交通の便が良い立地も魅力的ですね。」

——世間では「お寺離れ」「お墓離れ」が叫ばれていますが、どう思われますか。

竹鼻「最近はとにかく『面倒な行事は省略して、簡単で安く、楽であれば良い』という風潮になっていますが、自分のルーツを大切に、子孫の繁栄を願うなら、ご先祖様を供養する気持ちが大事だと思います。私が小さい時は、日頃からお寺さんのおつきあいがある家庭でした。お寺に伺ってお墓参りをし、仏様に何もかもをお任せして生きていく。まずは、親が子どもに

もにそういった姿を見せるべきではないでしょうか。」

——その通りだと思います。「お寺のある暮らし」で一番大切にしていることは何ですか。

竹鼻「ご先祖から脈々と受け継いでいる、いのちへの感謝だと思います。忙しい日々の中で、そういった感謝を忘れそうになる時もありますが、お寺に足を運ぶことで普段考えないことを自覚することができる。お寺は私にとって、そういった気づきを与えてくれる場所なのです。」

いのちへの感謝と気づき。

竹鼻充子さん(大阪府高槻市在住)

竹鼻さんはかねてより代々様のお墓を探しておられ、一昨年に大蓮寺とご縁をいただきました。以来、熱心に年間行事にも参加して下さっています。今年の初講・新年会の際、来寺された竹鼻さんにお話を伺いました(文責／編集部)。



basic information

仏女、菩提寺を知る

代々つづく、家の菩提寺。檀家さんと菩提寺とは、どういう関係にあるといえるでしょうか？すっかり大蓮寺に馴染んだ「仏女」ナカムラに住職が語ります。

